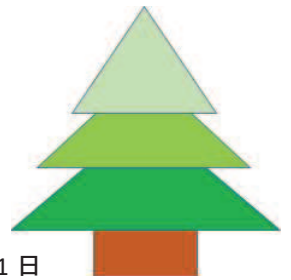




嵯峨宮頼り

第5号



嵯峨宮：群馬県みどり市大間々町小平 348 番地

発行日：2019年6月1日

発行：嵯峨宮世話人会

平成三十年度決算と 令和元年度予算概要

四月六日付で平成三十年度決算書を回覧致しました。単年度としては収入支出とも二十五万円余りではほぼ同額ですが、前年比で収入十一万円増、支出六万円増です。収入増の八割は新事業「埋蔵祈願」関連により増えます。支出増はタオル4年分と看板・嵯峨宮頼り発行・御神籤・電飾・感謝状副賞等の新規事業、保守用梯購入費などです。少額ですがお賽銭が前年比増し、私達役員の何よりの励みです。改革初年度は一般支出を極力切り詰め、社の補修や観光化向け整備を行って来ました。二年目の予算総額は収入支出とも前年度と同額を見込み、「頼り第3号」で述べた項目を中心に進める予定です。皆様のご協力をお願い申し上げます。

御神木とは

小平の嵯峨宮にはシンボルと言える二本の巨木がある。周囲四メートルもある一対の杉で、階段を登り詰めた両脇に門柱を兼ねてそびえ立つ。枝は社（やしろ）の屋根を覆い、根は石の階段をゆがませ、端を噛み込む。今の社を建造した時植えたとすれば樹齡は三百年位で、御神木と云うに相応しい。広辞苑によれば神木とは、「神社の境内にあって、その神社に縁故のあるものとして特に祭られる樹木。注連（しめ）を引き柵を設けるなどする。或いはこれを神体とするものもある。」とある。御神木には大きくなる杉や檜が植えられることが多い。昨今寺社も利便性や経済性を求め境内に駐車場や墓地を拡張する理

由から、或いは保守が大変だからと巨木が伐り倒される話を耳にする。

一年程前、ある勉強会の研修で高崎市吉井町にある仁叟寺を見学、住職のお



仁叟寺のカヤの木

話を聴く機会を得た。仁叟寺は室町時代の創建で、徳川家ゆかりの曹洞宗の古刹である。本堂前には五百年の歴史を証するカヤの大木がある。

「古いお寺、古い神社の境内には必ず大きな木があります。必ず在ります。杉や檜が。それもどうしてだか解りませんね。避雷針です。このカヤの木が雷を引いて、御本尊を、雷が落ちる

のを守ってくれたと言われていました。だから中は空洞です。平成元年に県の教育委員会が二百万円かけて全部中まで調べ樹木医が手を入れました。そしてから見事によみ返りました。又実を付ける様になりました。樹齡五百年です。」空洞は本堂に落ちる雷を回避できた証であり、電気学会誌にも論じられたものがある。今日では避雷針があるが設置するには安くない。木は植えるだけで何百年も維持費は掛からず、大きく育って性能も増す。人を癒し温暖化防止にも役立つ。単なる象徴だけでなく、身をもつて雷から社を守る役を負うところに御神木たる所以（ゆえん）がある。

嵯峨宮の御神木の根元に時々炭の粉が撒かれてある事がある。炭は樹木に好いという。地味ではあるが落雷危機管理という観点からも評価に値する。

残存者利益を考える

ビジネスの世界に於いて多くの企業が競争していた市場が成熟して飽和したり、社会やライフスタイル、人口構造の変化で市場規模が縮小して、競合他社が撤退し生き残った企業が市場を寡占・独占し安定的な利益を得られる場合、これを残存者利益という。「残り物に福がある」という言葉と表現は似ているが趣旨は全く異なり、他力ではなく自力で取得するものである。

が進み新しい事にはチャレンジしなくなる。こだわりのユーザー相手に改善、改良は欠かせないが、競合相手がいない市場はマイペースで対応しても客は離れず、値段も落す必要がない。設備は既に減価償却を終へ大きな新規投資は不要、だから利益を出し易い。まさに一人勝ちだ。

戦後日本は経済政策を基軸に豊富なマンパワーを都市部に集中させ第二次産業の効率を上げることで外貨獲得し、経済大国へと導いた。バブル崩壊で製造業は海外へ移転し、団塊世代の大量退職で人手不足と称し若者をさらに都市部へ集中させ、山村に限らず商業地も高齢化、地方は人口減少し疲弊していく。最近テレビで「ポツンと一軒家」なる番組がある。廃村した地に残る廃屋や寺社だったりするが、番組の都合上か高齢者一人住まいのケースが多い。ど

う見ても「福を謳歌」しているように思えない。稀ではあるがグルメを売りにした飲食店が山中にも拘らず予約で一杯と紹介される場合がある。こちらは子育て一段落の五十代の夫婦で、意外性も売りの一つとしているが、その技術とコンセプトはしっかりとしたもの裏付けられていることがわかる。

生活をビジネスと全く同じ土俵で考えることに無理もあるが、共通して言えることもある。従来と同じことをしているだけで福もないしその土俵で生き残れない。地方に残存し生業を持つ中高年者にとって、新規事業を立ち上げるのはリスクが大きい。改善改良を続ければ存命期間中くらいは残存者利益を享受できるだろう。ただ残存者利益は次世代迄受け続けられるものではないから、子育て世代は新技術新事業に携わる

必要がある。そこで課題となるのが教育であり、子の教育手段と親の専門レベルである。町村合併により学校教育も効率を求め統合化が進み通学距離も遠くなつた。義務教育迄は役所は面倒みるが高校大学は自力である。足がないからと妻と子供が高校近くにアパート住まいする例、老人を残し若者一家が街に転居してしまう例、家庭に大きな決断を迫られる。

中学校出たての子供を安心して預けられる学生寮を完備した高校はほとんど聞かない。さらに子育て中の親は自らのレベルアップを図り最新技術に関わらなければならぬ。組織に属すもよし、自ら新規事業にチャレンジするもよし、キャリアを積んでスキルを磨いておけば、やがては残存者利益を得られる素地をつくることのできる。子育て中は金がかかりリスクを負い難いが、体

力が一番充実し頑張れるときでもある。地方に残存することは人が少なく競争も少ない分、幅広かつ深い見識も必要となる。何事にも積極的に取り組む姿勢があれば、その分裁量も多く、頼られ、やりがいもある。残存者利益を享受できる環境は整い易い。

修繕「覆屋の床板」

おおいや

嵯峨宮本殿を囲む覆屋の床板はボロボロだが修繕する金もなければ腕もない、あるのは熱い思いだけ。そんな者も三人寄れば何とやら、栗材の床板を引き剥がして驚いた。根太がない。白蟻に喰い尽くされている。土砂が裏山から流れ込み床下の隙間を埋めている。白蟻被害は本殿にも及んでいた。基礎の切り石を動かすと古銭を十数枚発見、宝物と喜び元青年達は頑張る。(阿直)